



2016 ~ 2017 年度
R I テーマ

Rotary Serving Humanity 人類に奉仕するロータリー

国際ロータリー会長 ジョン F. ジャーム (国籍・アメリカ)

2720 地区

別府中央ロータリークラブ



例会日 火曜日 12時30分
ところ 別府亀の井ホテル 〒874-0936 別府市中央町5-17
TEL (0977) 22-3301 FAX 21-1232
事務所 別府市西野口町1番1号 青山通りビル 3F
〒874-0931 TEL (0977) 23-9000
FAX (0977) 23-9019
<http://www.beppu4rc.jp/chuo/>
E-mail: info@beppu4rc.jp

理事	梶原 和朗	理事	近藤 賢司	役員	会長	梶原 和朗	SAA	平野 教康
〃	佐々木久宜	〃	村津 忠久	副会長	副会長	佐々木久宜	直前会長	平野 教康
〃	平野 英壽	〃	後藤 隆	幹事	幹事	梅津 圭二		
〃	亀井 孝	〃	森園 伸也	会計	会計	土谷 昌志		

VOL. 29 - 47
2017年6月19日

第1331回例会

会報委員長 森 宗明

◆点 鐘 18:30

◆R S B.C.R.Cの歌

◆唱 歌 ふじの山

◆ビジター 村上 有紀 阿知波孝典
(6月20日) (以上別府)
堀 高志 神宮司 円
高橋 喜巳 金本 龍生
(以上別府北)
但馬 建 (別府東)

会長の時間

会長 梶原 和朗

みなさんこんばんは。
会長の梶原です。

例会に遅刻してしまい申し訳ありません。

本日が亀の井ホテル最後の例会になります。
新年度からは、別府パストラルに変更になります
のでお間違えのないように。

梶原年度も残す所あと2回となりました。
長いようで短い1年間でした。

来週は会長幹事慰労会です。みなさんご出席を
お願いします。

本年最後の卓話を梶原支店長にお願いしています。
卓話よろしくお願ひします。

以上で会長の時間を終わります。

◆出席報告

委員 衛藤 秀子

本日 の 出 席	会 員 総 数	26 名
	出 席 者	12 名
	事前メイクアップ	0 名
	理 事 会 承 認	0 名
	出 席 免 除	4 名
出 席	欠 席 数	10 名
	出 席 率	54.55 %
前 々 回 の 訂 正	出 席 率	68.18 %
	事後メイクアップ	0 名
	理 事 会 承 認	0 名
	出 席 免 除	4 名
	修 正 出 席 率	68.18 %

連 続 - 回
通 算 750 回 100 %

・メイクアップ

事前

事後

欠席 後藤、堀、亀井、前田、森園、中尾、
大島、田添、土谷、津末

理事会承認

出席免除 溝部、河村、木村、森

◆幹事報告

梅津 圭二

—青少年奉仕月間—

1. 本日の卓話

「新会員卓話」梶原茂樹会員



2. 6月18日(日) 11:00~大分オアシスタワーホテルに於いて「2720JapanO. K. ロータリーEクラブ RI加盟 認証状伝達式」が開催され、梶原和朗会長と梅津圭二幹事が出席致しました。
3. お祝い(次週、会長幹事慰労会の為、皆勤祝いを除くお祝いを本日2週分致します。)
 会員誕生日 衛藤 秀子会員(6月25日)
 亀井 孝会員(6月27日)
 ※記念品をお渡し致します。



- 結婚記念日 土谷 昌志会員(6月30日)
 ※ご自宅にお花が届きます。
- 配偶者誕生日 梶原 由起さん(6月22日)
 森 北実さん(6月30日)
 ※記念品をお渡し致します。

4. 例会変更のお知らせ
 湯布院RC 7月5日(水)の例会は、会長・幹事歓送迎会の為 同日18:30~場所未定で時間・場所変更
5. 次週例会の予定
 「会長・幹事慰労会」
 ※27日(火)の例会を変更し、26日(月)18:30~ホテル山水館に於いて開催いたします。
6. 本日の回覧
 ①「夜例会」出・欠席
 ②「親睦ゴルフコンペ」出・欠席
7. 本日の配布
 ① 週報No.1310

スマイルボックス 委員長 高宮 勝美

- 佐々木会員
 梶原さん、今日の卓話楽しみにしています。よろしくお祈りします。気温が高くなり、エアコン工事に追われています。仕事出来る事に感謝してスマイル!
- 梅津会員
 今日が亀の井ホテルで最後の例会になりま

す。じっくり味わって下さい。梶原支店長、卓話よろしくお祈り致します。

- 西馬会員
 松山秀樹が全米オープンで2位、世界ランキングも2位になりましたので、興奮のスマイル!
- 衛藤会員
 梶原会員様、本年最後の卓話、しかも亀の井ホテル最後の例会ですね。卓話楽しみにしています。
- 近藤会員
 今日が亀の井ホテル最後の例会です。おいしい料理をいただきながら最後の晩餐を楽しみましょう。
- 村津会員
 昨日、日曜日、ビーコンプラザで「第49回大分県合唱祭」が公演され、私共・「B混記念合唱団クール・あおやま」も出演して好評でした。36名の出演者と客席のお客様に感謝してスマイル。
- 鳴海会員
 本年度亀の井ホテルでの最後の例会を祈念してスマイル致します。
- 高宮会員
 梶原会員の卓話、楽しみにしています。梶原茂樹さんの紹介者として一言。平成の坂本竜馬といわれた参議院議員の梶原敬義氏の長男です。生年月日は昭和40年1月17日、私が1月18日です。一日違いの誕生です。ちなみに1月16日が森会員です。1月生まれは優秀です。鳴海会員、平野兄、次期佐々木会長です。

卓話 梶原 茂樹

本日は初めての卓話として上手く話せるか心配ですがよろしくお祈りいたします。テーマを何にしようか悩みましたが、私の学生時代の経験についてお話します。三十年前のことなので記憶が曖昧なところがありますがご容赦下さい。



私は地元大分大学経済学部を卒業しましたが、3年が終わって4年生になった時、思うことあって大学を休学しました。海外を時間をかけて回りたいと思い、最初は一年の約束で休学を申請しましたが、結局一年と半年間のアメリカ・ヨーロッパ放浪生活を送ることになり、休学期間は二年間に延びてしまいました。帰国して4年生をやり6



年生と同じタイミングで卒業となりました。

大学では剣道部に所属し、強くはなれませんでした。が、一生懸命汗は流してきました。学業よりも部活優先の学生生活でしたが、剣道部は3年の終わりで現役引退の決まりでして、普通なら就職活動を開始するところですが、就職したら自由な時間はとれなくなるだろうから一生の内でも今しかないと思ったこと、父も「可愛い子には旅をさせる」のことわざに習い応援してくれたこと、作家五木寛之の著書で「青年は荒野をめざす」の影響を受けたりして、決断しました。「青年は荒野をめざす」という本は、受験に失敗した20歳の若者ジュンが、アルバイトでお金を貯めて放浪の旅に出るストーリーで、ジャズトランペットを吹きながら、ナホトカ、モスクワ、北欧、パリ、マドリッド、リスボンからアメリカに渡るといふ青春小説です。当時読みあさっていた五木寛之の著書の中で最も感銘を受けた一冊でした。

私が海外で放浪した時期は、1986（昭和61）年から1987（昭和62）年で、年齢は出発した時が21歳で帰国したのが22歳でした。

アメリカ西海岸サンフランシスコ空港に降り立ってから、サンフランシスコ湾の対岸のオークランド周辺で約一年間皿洗いなどで資金を貯めた後、グレイハウンドバスでアメリカ大陸を横断し、ニューヨークからヨーロッパに渡りまして、ドイツ、イタリア、フランスはリビエラ海岸を列車で素通りし、スペイン、そしてポルトガル、最後はイギリスロンドンからシベリア上空を経由して帰国しました。地球を俯瞰したら北半球一周となる行程でした。

英語は苦手でした、中学生程度のカタコト英語とボディーランゲージで勝負でした。

先ずは渡米と思いましたがどうすればいいかわからず、たまたま書店で目に入った一冊の本を手掛かりに計画を立てました。観光ビザでの入国は期間に縛られます。確か当時は観光ビザでは二ヶ月間しか滞在できないことになっていたと思います。長期滞在には学生ビザが適していて、私のような勉強が目的でない者にとっても、アダルトスクールで学生ビザを取る方法が安く時間に縛られない渡米の方法と書いてありました。

アダルトスクールとは響きから若干いかがわしいように感じると思いますが、アメリカは移民の国であり、移民のための母国語を教える施設がアダルトスクールです。米国国内に沢山あり、一部外国人も通えて、費用も安くなっています。私はその滞在方法を実践することにしました。

アメリカカリフォルニア州オークランドは、メ

ジャーリーガー松井秀樹が引退前に所属していたアスレチクスの本拠地の都市です。サンフランシスコの湾をへだてた対岸に位置し、気候は温暖。ベイブリッジや地下鉄バードでサンフランシスコに直ぐにアクセスできる立地です。

最初はピードモントアダルトスクールという閑静な住宅街にある学校に籍を置いていましたが、途中でカリフォルニア州立大学バークレー校のある学生の街バークレーのアダルトスクールに転校しました。

ベイエリアには約一年住むことになりましたが、その間、3つの日本レストランで働かせてもらいました。最初は、電話帳からオークランド周辺のジャパニーズレストランを片っ端から訪問し雇ってもらおうとしました。簡単にはいきませんでした。幸運にもバークレーの学生街で日本の大東文化大学に留学経験のある台湾人リュウさん夫婦が経営する「ジャパニーズスナックス」という店名の小さなレストランで雇ってもらえることになりました。リュウさん夫婦はとても親切にしてくれましたし、醤油ベースの色々な肉と野菜を組み合わせたライスプレートメニューは、日本の牛丼のようで牛丼とは違う面白い味でしたが、クセになる美味しさでした。

その後日本人が経営する2つのレストランで働きました。ドイツシェフ兼天ぷら揚げ担当やバスボーイとして深夜まで働きました。バスボーイとは食べ終わったお客様の食器を下げる専門の係です。今思い返しても周りの日本人の中では一番働いていたと思います。

寿司職人への誘いなどもありましたが、私としては旅の途中、一箇所に長居をして一年が経過してしまったことは、当初の計画からすれば本意ではなく、新居地への旅立ちを決意します。

サンフランシスコのジャパントウンにある紀伊國屋書店で貧乏旅行、バックパッカーのバイブルであります「地球の歩き方・ヨーロッパ編」を購入して研究し、クレイハウンドバスでアメリカ大陸を横断し、ニューヨークからヨーロッパへ渡った後は、ユーレイルユースパスで移動する計画を立てて実行に移しました。ユーレイルユースパスとは、25歳以下の若者限定の西ヨーロッパ圏内二等列車乗り放題チケットです。バックパックと寝袋も調達しました。「地球の歩き方」は貧乏旅行に必要な情報が満載のハウツウ本で、今も書店で売っています。これ以降は「地球の歩き方」頼りの旅となりました。

日本人、コロンビア人、グアテマラ人、タイ人の友人達に見送られながらグレイハウンドバスに



乗り込んだ時、一年を振り返って感慨無量で涙が溢れてきたことを思い出します。

グレイハウンドバスでサンフランシスコからニューヨークまで州間高速道路80号線でほぼ一直線です。乗り続ければ三日で横断できるのですが、私は夜に乗ってバスの中で睡眠を取り、朝到着した街を観光するようにしましたので一週間かかりました。カリフォルニアからネバダ州リノ、ユタ州ソルトレイクシティ、ワイオミング州シャイアン、ネブラスカ州オマハ、イリノイ州シカゴ、ここでニューヨークを乗り間違えてペンシルベニア州ピッツバーグを経由してようやくニューヨークに到着しました。

中西部の街は人種のるつぼと言われるサンフランシスコやニューヨークとは様相が異なっており、アメリカの広さ、多様性を感じました。

ニューヨークではYMCAに宿を取り、一週間滞在しました。観光しつつヨーロッパに渡る格安航空券を探しました。ビューティフルが口癖の陽気な社員がいて、うさん臭いと思いましたが、一番安かったパキスタン空港に決め、ユーレイルユースパスを購入してニューヨークをあとにしました。フランクフルト経由カラチ行きの機内はほぼ全員がターバンを頭に巻いたパキスタン人でしたが、無事にフランクフルト空港に到着しました。

ヨーロッパでは、東西冷戦の象徴である「ベルリンの壁」をこの目で見てみたいと思っていましたので、最初の目的地を西ベルリンとしました。「ベルリンの壁」について少し説明させてください。

第二次世界大戦が終結し、ドイツはアメリカ、イギリス、フランスの連合国が西側を、ソ連が東側を占領し、1946年に東西ドイツが成立しました。

首都であったベルリンは、東ドイツと西ドイツの国境の真ん中にある訳ではなく、全域が東ドイツの中に存在していて、西ドイツからは完全に離れていました。西ドイツ領内からは130km離れている離れ小島のような都市です。

このベルリンは、戦後処理を決めた1945年のポツダム会談で、アメリカ、イギリス、フランス、ソ連の戦勝四カ国の分断占領となりましたが、東西ドイツが成立後もそのままとなり、その後のアメリカとソ連の対立の激化で東西ドイツ間の国境が閉鎖された後は、唯一東西の行き来が自由であったベルリンでは、東ベルリンから西ベルリンへの人口流出が止まりませんでした。

そんな中、東西ドイツが成立して15年後となる1961年8月13日午前零時、突然東ドイツにより有刺鉄線で西ベルリンの隔離が始まり、後にコン

クリートの壁が築かれました。東西ベルリン間48kmを含む155kmの囲いで、命からがら西ベルリンへ逃げ込んだ人もいましたが、多くの東ベルリンの人々は家族が分断されたりしたまま自由のない辛い生活を強いられることとなります。

ベルリンの壁は東ドイツを外界から遮断し、自由の体制を守る壁でした。東西冷戦の象徴であり、ドイツ分断の象徴となります。

さて、青年梶原はフランクフルトから一路西ベルリンを目指します。ユーレイルユースパスを使っての陸路で、東ドイツとの国境を越えて西ベルリン終点ツォー駅で下車です。

私にとっては初めての陸路国境越えでありまして、それも東西冷戦の象徴である国境なので緊張したのを思い出します。

東ドイツに入った直後に列車が止まり、西ドイツ側の乗務員が降りて東ドイツ側の乗務員に総入れ替えとなりました。列車の外では沢山の東ドイツ兵や軍用車両が物々しく、軍用犬を使って列車の下に人が隠れていないかチェックをしていました。背の高い有刺鉄線が見渡す限りに延びていて、これが世界で一番厳しい国境なのだと興奮し、列車が走り出しても、車窓から見える国境警備の姿や町の様子を写真に納めていました。しばらくして乗務員に呼び止められ、各車両にあった乗務員専用らしき空室のコンパートメントに連れて行かれ、私のカメラを指差しながら何やらドイツ語でまくしたてられました。何を言っているのかさっぱり分かりません。しばらくして英語で書かれたペーパーを見せられ、段々と状況が飲み込めてきました。国境警備を写真に納めるのはスパイ行為であるから、フィルム没収の上、罰金を払えと言っているのです。また、私が乗務員と思っていた人たちの背中にはドイツ語で警察の文字がプリントされていることにそこで気付きます。国境で単なる乗務員の入れ替えが行われたのではなかった。乗り込んで来たのはみんな東ドイツの警官だったのです。

このまま従わなければ、途中下車し東ドイツに連行されそうな恐怖を感じて、要求通りフィルムを渡し、罰金は80マルクだったと記憶していますが、食堂車で西ドイツマルクを東ドイツマルクに一对一の交換レートで両替させられて支払いました。当時1マルクは80円ぐらいだったと思います。日本円で7000円ぐらいの罰金額でしたが、私にとっては大金です。

無事に解放され、西ベルリンツォー駅に到着しましたが、ヨーロッパの旅の序盤における罰金の出費は、私の滞在期間の短縮を意味します。取り



返すべく宿泊費を浮かそうと思い、駅で野宿することにしました。

売店で買ったソーセージを夕食にして寝袋を敷く準備をしていましたら、西ベルリンの若者が声を掛けてくれました。彼は最終便に乗った友人を見送った帰りで、私を列車を待っている旅行者と思い、親切で最終列車が出てしまったことを教えてくれようとしたのでした。

私は事の顛末を伝え、東ドイツに奪われたものを取り返すために駅で野宿するのだと話したら、とても気の毒に思ってくれて、駅前のカフェでコーヒーを奢ってくれました。色々な話をして結局その夜は彼の家に泊めてもらい、翌日は彼が出勤の途中に車でユース hostel まで送ってくれました。会ったばかりのバックパッカーに親切にしてくれた西ベルリンでのこの日の出来事は、東ドイツでのトラブルを帳消しにして余りあるものとなりました。

翌日は満を持してベルリンの壁に向かいました。西ベルリン側から見る壁は、政治的メッセージが満載の芸術的な落書きで覆い尽くされていましたが、少し離れた所には東ベルリンからの脱出に失敗して射殺された人々の十字架があったりして、ドイツ分断の生々しい事実を感じ取ることができました。

次は、東ベルリン側から壁を見ることにチャレンジしました。当時はチェックポイント・チャーリーという検問所があり、旅行者は徒歩で一日だけ東ベルリンに入ることができました。一日ビザに5マルクと西ドイツマルクを東ドイツマルクに強制両替が義務付けられています。強制両替は25マルクだったと思います。

「地球の歩き方」の情報に沿って、チェックポイント・チャーリーへ行き、手続きをして徒歩で東ベルリンへ入りました。最初に訪れた東ドイツ博物館は、ヒトラーがエジプトやギリシャから略奪した数々の展示物が会ってレベルの高い博物館とのことでしたが、ヒトラーが略奪というのが頭に残り素直に鑑賞できませんでした。

東ドイツマルクと西ドイツマルクは強制的に一对一で交換させられましたが、実際には東ドイツマルクの価値は西ドイツマルクの五分の一ぐらいで強制両替した25マルクを一日で使い切るのは大変なので、バックパッカーはこの際レストランでしっかり食事を摂るべきと「地球の歩き方」に書いていましたので、博物館の後、私もヨーロッパに渡って初めてレストランに入り、まともな食事をしました。メニューはハンバーグとジャガイモ料理だったと記憶しています。レストランはとて

も混雑していました。味はまずまずだったのですが、残念なことに例のカメラを食事中に盗まれたようで、レストランを出て気が付いた時には既に遅く、レストランに戻って探しましたが見つかりません。

気を取り直して凱旋門であるブランデンブルク門を観た後、人がいない壁の近くを見て回りました。兵士が軍用バイクで壁に沿って走って行くのを見ましたし、道路や建物が不自然に寸断されていて、いまなり壁が作られた様子が見て取れました。ベルリンの壁の東側は殺伐とした風景がずっと続いていたのでした。

実は私が訪れた二年後の1989（平成元）年11月9日にベルリンの壁は崩壊します。ソ連ゴルバチョフ書記長の改革ペレストロイカで、ソ連東欧諸国との関係が変わり、東欧諸国では民主化の気運の高まりや共産主義の経済的な限界が表面化していたこともあり、一気に流れが変わったようです。私が銀行に就職して一年目の秋の出来事でした。テレビでベルリンの大衆がベルリンの壁に登り、歓喜している映像を見て、まさか、あの悲しくも永遠に存在し続けると思っていたベルリンの壁が崩壊するなんて、と大きな時代の流れを感じざるを得ませんでした。

ベルリンを後にして、ケルンやバンクーバーを回り、ミュンヘン郊外にあるナチスドイツの強制収容所であるダッハウ強制収容所の博物館を見学した後のミュンヘンでの出来事とも思い出深いものがあります。

ミュンヘン駅は美しく、政治も良いので学生の夏休みのシーズンは、駅で野宿する各国のバックパッカーのカラフルな寝袋で駅は埋め尽くされてしまいます。私もなんとか寝袋を敷くスペースを確保して野宿しましたが、他のどんな駅よりも快適でした。

翌日、街を観光していて、交差点で信号待ちの青年梶原に、おじさんが話しかけてきました。

「日本人か？」

「そうです」

「よく来た。ビールを奢ってやろう」

こんな会話だったと思います。ボフプロイハウスという、ヒトラーがナチス旗揚げの大集会を開いたという歴史的にも有名なビアホールに連れて行ってくれました。家に泊まれとなりましたが、ミュンヘン駅で野宿と決めていましたので丁重にお断りしました。

次の日、駅でもう一泊することにして寝袋を広げていましたら、あのおじさんが仕事帰りに「あの日本人はどうしているか」心配になって私を捜



しに来てくれました。結局その日は泊めてもらい、溜まっていた洗濯とシャワーにありつくことができました。ベルリンに続いてミュンヘンでもドイツ人の親切に触れることができました。

それからは、ミュンヘンからイタリアに南下。ローマ、ナポリを回って物価の安い国をターゲットにフランスを通り越してスペインを回りました。バルセロナではガウディのサグラダファミリアのコーンのような塔に登りました。マドリッドではバルという酒場でサングリアというお酒を飲み回りました。

スペインのセビリアではピンチがありました。その日は猛烈に暑く温度計は45度以上。「地球の歩き方」に掲載の安宿がどこも一杯で泊まれません。治安が悪いので駅で野宿もできません。夕方になり、暑さと英語も通じず宿も決まらないことで参ってしまった青年梶原は、のどの渇きを潤すために小さな雑貨屋に入り、ビールを買いました。私の困った様子を察してお店のおかみさんが英語で話しかけてくれました。事情を伝えると、たまたまそこに宿屋の息子が買い出しに来ていて話をつけてくれました。彼は高校生ぐらいだったと思います。宿屋に案内してくれて、野宿を回避することができました。たまたまその日はお祭りでした。宿屋のおかみさんが気を使って言ってくれたようで、息子が夜の街に連れ出してくれました。彼はとても優しい好青年でしたが、スペイン語しか話せません。私は彼が何を言っているのか分からないまま、カタコト英語とボディランゲージで接し、お互い言葉は全く通じませんでした。お祭りの夜を楽しむことができました。人間は言葉よりもハートだと確信できたエピソードです。

物価が安かったポルトガルでは、リスボン、ポート、コインブラ等のユースホテルでの宿泊をベースとして回りました。

コインブラのユースホテルでの一コマですが、私が到着してリビングでチェックインの手続きをしていた時に、テレビでアニメが流れていて何気なく見ていたら、ユースホテルの職員さんがテレビを指差し、これはテレビというものだが知ってる？のような質問をしてきました。テレビは日立製でした。ポルトガルはマカオを植民地として持っていた関係からか、中国の情報、それも牛で田んぼを耕すというような農村風景が国营テレビでよく放映されていて、中国の農村風景と同じ東洋人の日本人と日本の優れた技術等がごちゃ混ぜになってしまい、田舎ではそんな話になるのだろうと思いました。さすがにリスボンではそのような場面に遭遇することはありませんでしたが。

一周回ってリスボンに帰ってきたユースホテルで青年梶原は東北出身のヒッチハイカーのみなおさんに出会います。みなおさんは30歳ぐらいの、スペインからヒッチハイクで旅してきた筋金入りのバックパッカーでした。田舎町で友達になったリスボン在住のポルトガル人と今日会うことになっているが一緒に来ないかと誘われたことがきっかけで、みなおさんの友人ジョアオとその仲間たちと出会い、その後は、バカンスを共にして楽しい時を過ごすことができました。みなおさんがヒッチハイクで旅立った後も、ポルトガルが大好きになった私は、ユーレイルユースパスの期限切れもあって、「地球の歩き方」で見つけた安宿をベースに滞在を続けて、結局約4ヶ月間、ポルトガルで過ごすことになりました。

そして1987年12月、リスボンを後にしてロンドンに一週間滞在后、英国航空で帰国しました。空港には当時東京の短大に通っていた妹が迎えに来てくれていて助かりました。実は所持金が底をつき、成田からの交通費がありませんでした。妹が迎えに来てくれるとは思っていませんでしたが、日本に帰れば何とかなんと放浪ボケしていたようです。

帰国後大学4年生をやって豊和銀行に就職してからは、予想通り再び海外を放浪するような時間は全くありませんでしたので、21歳のあの時の判断は正しかったのでしょうか。

今振り返ってみると、多くの人々の親切に支えられての一年と半年でした。改めて感謝です。

また、休学一年の約束が二年になっても許してくれた両親に特に感謝ですが、実はグレイハウンドパスで旅立ってからしばらくの間、旅立ったことを両親に報告するのを忘れていて、スペインのマドリッドで初めてコレクトコールで母に連絡したのですが、帰国後妹から行方不明の私を母がとても心配していたと聞き、なんて親不孝なことをしたのかと大いに反省したのであります。

私は今、当時の両親と同じ年代になっています。今回卓話の原稿を書き終えて改めて親不孝者の反省の念がこみ上げてきました。

